
届かない祈り

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

届かない祈り

【Nコード】

N2824C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

月は見ているの続編(?)です。月は見ているのちょっと前のお話。

「好きなんです……」

目の前の少女——たしか、霞未楓とか言ったか——は今にも消え
いつてしまいそうな声で、それだけ、言った。

とくにどうということもない、普通に可愛い女の子だった。もち
ろん朔夜には及ばない。

「それで、おれに、どうしてほしいの？」

なにを言うつもりなのかはわかつているのに、おれはわざと意地
悪く訊ねた。

こういう場合、つきあってください、とか、そういう言葉がつづ
く。今まで、そうでなかったためしはない。

だからおれは、正直、うんざりしていた。

「どうしてって……。ひどい。斎さん、なにも、そんな言いかたし
なくたって……」

「なにがひどいの？ おれのことをよく知りもしないでつきあつて
くださいなんて言うのだって、充分にひどいよね？ それなのに、
きみはおれを責めるの？」

泣きそうになっている彼女に向かって、おれは告げた。

どうして気づかないんだろう、といつも思う。

彼女たちはいったい、おれのなにを知っているというのだろう。
知りもしないで好きだなんて言うのがどれだけばからしいのか、
わからないほどに彼女たちは愚かだ。

彼女はきびすを返して走り去った。

おれは黙って見送った。そしてすぐ、頭を切り替える。

——行こう。

朔夜が、待っている。

「……遅い」

朔夜は昇降口で待っていた。くちびるをとがらせて、怒っている。

「ごめん」

おれは朔夜の頬を両手でつつんだ。つめたい。

ずいぶん待たせたのだろう。

もう一度ごめんとつぶやいて、額に口づける。

「いいよ、許してあげる。でもどうして、こんなに遅かったの？」

「——ちよっと、ね」

頬よりもずっとつめたい、朔夜の黒髪をなでる。髪をひとふさつかんで、そこにもキスを落とす。

「隠しごとするんだ」

朔夜は頬をふくらます。

でも、本当のことを言ったら、朔夜はもつと怒るだろうから。

だからおれは黙っている。

こうして秘密にしていることが、実は、おれにはたくさんある。

「たいしたことじゃないよ。帰ろう？」

朔夜はしぶしぶといったふうに、うなずく。

おれは朔夜の鼻先にキスしようとして、せき込んだ。

いやなせきだ。まるで、結核患者のような乾いたせき。

「——大丈夫？」

とたんに、朔夜の機嫌はなおる。心配そうな顔になる。

「大丈夫だよ」

おれは微笑んでみせた。

本当に、朔夜は心配性だと思う。

たぶん、ちよっとした風邪だろう。だからそれほど気にすることもないのに。

冷えた朔夜の手を握って、おれは歩き出した。

その夜、おれは血を吐いた。
口許を押さえて軽くせき込んだら、てのひらには血がついていた。
赤い、血だ。

いやに鮮やかな。

これは動脈血なのか、それとも静脈血なのか。そんなくだらない
ことを考えてみる。

そもそも、喀血したときの血は、いったいどこからの出血なのだ
ろう。

肺か、のどか、それとももつと別の器官か。

どこかの粘膜だとしたら、血は止まりにくいかもしれない。

あふれる血は体内に蓄積されて、身を内側から黒く染めていく。

おれはくつくつと笑った。

なんだか愉快的な気分になって、そのままふとんに潜り込んだ。

おれは色素が薄いけれど——死に向かうにつれて、だんだん黒く
なっていく。

死体はきつと真っ黒なのだ。

白花に囲まれた黒いおれ。

とても、愉快だ。

心残りはあるけれど。

昨夜を残して逝くのは、どうしても心残りだけれど——

そう思ったところで、目が覚めた。全部夢だった。

おれはまだ、生きている。

S H Rが終わってすぐ、おれは教室を抜け出した。

誰も声をかけてこない。

おれが正妻の子ではないと、誰もが知っているからだ。おれはつまりは異分子なのだろう。

朔夜と色違いのコートをはおつて、屋上へ行く。今日はなんだか熱っぽい。

重い鉄の扉を開けると、強い風が吹きつけていた。ここはいつも風が強い。

うしろ手に扉をしめて、フェンスの方へと歩いていく。

先客が、いた。

ポニーテールが風に弄ばれて踊っている。短いスカートはめくれあがって、今にも中身が見えそうだ。彼女はフェンスに寄りかかって、上を見ていた。

昨日の女の子だ。名前は———なんといったか、忘れてしまった。

「……偶然、ですね」

彼女ははにかみながら言った。

昨日のことなどにも覚えていないかのような態度に、おれは少しだけ当惑する。

女の子たちはみんな、おれがああやって断ると、悪いうわさを流したり、おれをあからさまに避けたりする。

こんな変わった反応をされたのははじめてだった。

「斎さんもサボリですか？」

「そうだけど」

「あたしもなんです。奇遇ですよ、ほんと。昨日の今日なのに」

「……覚えてるんだ？」

「ええ、もちろん。忘れるわけありません。でも、気にしてたって仕方ないでしょう？ あたし、ふられちゃったんですから」

彼女ははきはきと述べる。少し好感を持った。陰湿なほかの女子よりは、断然悪くない。

もちろん、あくまで悪くないのであって、いいわけではない。おれが「いい」と言うのは朔夜だけだ。

「斎さんは好きな人とか、いるんですか？」

「いる、けど。それが？」

「どうもいませんけど、意外です。斎さんって、そういう感情とは無縁そうだから」

「ならなんで、告白なんか」

「どうしてでしょうね……。あたしにも、よくわからないんです。きつとなにかがあつたんだと思いますけど、それがなんなのか、あたしは知らないですよね」

「へんだとは思わないの、それ？」

「言いながら、おれはせき込んだ。」

「思いません。あたしにも、ほかの誰にも、理解できないようなこととって、世界中にたくさんあるじゃないですか。ミステリイサークルだって、霊だって、正体はわかってないでしょう？」

彼女が背中をさすってくれる。普段なら不愉快でたまらないところだけれど、今は我慢できないほどではなかった。

おれはこんなことを考えていると知ったら、朔夜は怒るだろうか？

あの、痛いくらいのまっすぐさで、おれを不実だとのしるだろうか？

「世の中にあることは、なんでも不思議なんです。でも、不思議だらけてことは、少しも不思議じゃないんですよ」

「でも、きみはへんだね」

「あ、ひどいです。へんだなんて。个性的とか言ってくださいよ」

「……そう？ 个性的なんて言葉のほうが、ずっとひどいと思うけど」

なんとなくよさそうに思わせておいて、実は言っていることは変わらない。

それならいつそ、正直に言った方がいい——と思うのはおれだけだろうか。

ひときわ強くせき込むと、点々と赤いものが、フェンスに散った。

「……斎さん!？」

彼女があわててティッシュをさしだす。ありがたく受け取って、口許と、フェンスをふいた。

「大丈夫。気にしなくていい」

「どこがですかー！ 熱だつて、こんなに……」

おれの額に手をあてて、彼女はわめき散らす。彼女の手は雪女のようにつめたい。

「いいんだ」

おれは手を外させて、きつぱりと言った。その場にしゃがむ。フェンスに寄りかかって空を仰ぐ。

灰色がかつた青い空。

絵筆を洗ったあとのバケツの水をしみ込ませたような雲が、たくさん浮いている。

「——ああ、このことは誰にも言わないで。いいね？」

「そんなの勝手です」

「そうだよ。おれは勝手な男なんだ」

「……斎さんに好かれてる人がかわいそうです」

「いいんだよ、心配させたくないんだから」

冗談めかして、口にしてみる。

たしかに朔夜はかわいそうだと、おれも思う。

朔夜はおればかりを見てはいけない。

それなのにおれは、朔夜がおれを見ないように仕向けたりはしない。できない。

おれは朔夜の影なのに、わがままを言つて、朔夜を縛りつけている。

「本当に、好きなんですネ。その人のこと」

彼女がぼつりとつぶやいた。

「もちろん」

「もしもその人より先に、あたしと出逢っていたら——少しでも、好きになってくれましたか？」

「むりだね」

おれと朔夜は、同じ日に生まれたから。

母親は違うけれども、だからこそおれは朔夜の影で、ずっと朔夜を想いつづけてきたんだから。

「そうですか……」

彼女は笑った。

細くなった両目から、涙があふれた。

ハンカチを出して目許に当てている彼女から目をそらして、おれはまた空を見た。

彼女はもう、おれの世界にはいない。

そのとき空をひかりが裂いた。

一瞬遅れて、腹にひびくような音がとどろいた。

神鳴り、だ。

雷が鳴っている。

ということは、近くに神がいるのだろうか。ふと、そんなことを思う。

もしもいるのだとしたら、祈ってみたい気がした。

おれはもうすぐ、死ぬだろう。そんな予感があるから。おれの予

感をよく当たるのだ。悪いことはとくに。

せめて、朔夜には幸せを。

でなければおれに、もう少しだけ時間を。

そんなことを祈る。十字をきりはしないけれど。

——ぼつ、と。

鼻先につめたいものがふれた。

雨、だ。

熱をおびた体には心地いい。

髪に、

服に、

肌に、

しみて熱を奪っていく。

雨に打たれながらおれは、小さく口の中で祈りの文句をつぶやい

た。

祈りは届くことはない、知っているというのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2824c/>

届かない祈り

2010年10月8日15時05分発行